

# 伝聞行動に関する日韓対照研究

— 伝え手の配慮意識に注目して —

石塚ゆかり\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 本研究の枠組み
  3. 調査概要
  4. 分析と考察
  5. まとめ
- 
- 

## 1. はじめに

近年、さまざまな分野で日本と韓国の交流が深まるにつれ、多くの人やもの、情報などが国境を越え、両国間を盛んに行き来するようになり、両国に驚くほど類似点が多いことが指摘されるようになった。このような類似点ばかりが強調されると、異文化という意識が薄れ、ちょっとした自文化との相違が気になりはじめることがある。そして、このような小さな疑問や驚きが、戸惑いや苦痛へと発展し、いつの間にか、どことなくわだかまりがあるようなぎこちない人間関係が形成されてしまう可能性もあるだろう。任(2006)<sup>1)</sup>は日韓の違いを日本人が使用する木製の箸と韓国人が使用する金属性の箸、チョッカラクに喩え、チョッカラクと箸は形や使い方が似ているからこそ、その使われ方や機能が比較されやすく、先入観や抵抗感も感じやすいと述べている。このようなコミュニケーション・トラブルを回避する手がかり

---

\* カトリック大学校日語日本文化学科 専任講師 日本語教育・社会言語学

1) 任榮哲(2006)『韓国人による日本社会言語学研究』おうふう p.16

を探るために、最近では日本人と韓国人の言語行動などに関する対照研究が注目されるようになってきた。

本稿で取り上げる「伝聞」は、第三者から聞いたことを別の人に伝えるという言語行動の一つであると言え、当然ながら日本でも韓国でも日常生活の中で頻繁に行われている行為であるものの、日韓の伝聞に関する違いについては今までほとんど取り上げられていない。しかし、実際のコミュニケーション場面における「伝聞」という行為は、元話し手からのメッセージをそのまま伝えるような単純作業ではなく、伝え手は元話し手や聞き手との関係に配慮し、メッセージを伝えるという目的を達成させる必要がある。そのため、伝え手が誰に対し配慮するかということによって、メッセージの内容や伝え方が異なってくる可能性が高く、伝え手の伝え方次第では、同じ文化背景を持った人同士のコミュニケーションにおいてもトラブルの原因となることが少なくない。日本と韓国では、伝聞行動で使用される表現形式はもちろんのこと、これらの表現形式を取り巻く人間関係やメッセージの内容の捉え方、伝え手の配慮も同じように思われがちであるが、実際には異文化としての違いがかなりあるのではないかと予測される。

このようなことから、本稿では人から聞いたメッセージを別の人に伝えるという伝聞行動における伝え手の配慮意識について、伝聞内容や人間関係の違いに注目し、日韓の特徴を明らかにしていく。

## 2. 本研究の枠組み

一般に「伝聞」に関する研究は、文末形式に注目したモダリティの分野で取り上げられることが多い。益岡(1991)は伝聞について「伝聞の場合は、他からの情報をそのまま伝えるだけの表現であり、表現者の判断は問題にならない」<sup>2)</sup>としている。森山(1995)は、「話し手が自ら作り出して得られる判断ないし認識を表すのではなく、言語的情報の受け取り方を示すという意味になっている」とし、伝聞では話し手によって情報の捉えかたは示されていても情報内容の構築はなく、伝聞の機能は既に言語化している情報を話し手がどういうものとして扱うかという機能である<sup>3)</sup>と説明している。また、仁田(2000)は認識のモダリティを伝聞と判定のモダリティに下位分類し、伝聞は命題内容の仕込み方・入手の仕方にかかわるものであり、伝聞は大きく「命題たる事態は第三者からの情報である」「第三者からの情報を聞き手に取り次ぐ」という伝達性を基本に有している<sup>4)</sup>としている。

2) 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版 p.121

3) 森山卓郎(1995)「『伝聞』考」『京都教育大学国文学会誌』26 p.27

4) 仁田義雄(2000)『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店 p.158

このような伝聞に関する研究のほとんどは、発話を取り込むときに文末に出現する「そうだ／よくだ／らしい／んだって」などの言語形式の違いに注目し、それらの置き換えが可能かどうかなどについて検討したものである。また、これらの研究では、伝聞を文レベルの機能としてモダリティという命題に対する伝え手の心的態度から捉えるということが基本的な概念となっていて、受け取った言語的情報に対する伝え手自らの判断は含まれていないようである。しかし、実際のコミュニケーション場面では、伝え手の判断において元話し手から受け取った情報を聞き手に大げさに伝えたり、自分のことのように伝えたりすることもあれば、全く伝えないということさえある。つまり、伝え手の判断は実際の伝聞場面における表現形式や働きかけ方などを決定づける重要な要素であると思われる。

そこで、本稿では、伝聞を一つの言語行動として捉え、実際の伝聞行動において伝え手が誰に対して最も配慮するかの問題を取り上げることによって、言語形式や働きかけ方などを決定する際の伝え手の判断基準を探る一端としたい。最近の言語行動研究では、さまざまな視点から言語行動における配慮についても検討されている。国立国語研究所(2006)では、言語行動に関する配慮を次の3つの側面・要素から捉えている<sup>5)</sup>。

- (1) <留意事項> : 具体的な言語行動を準備したり備えたりする際には、その言語行動の構成要素の諸側面にわたって、行動主体が気を配る<留意事項>が存在する。
- (2) <価値・目標> : <留意事項>には、言語社会や言語場面などに応じて、行動主体が実現しようとする様々なく価値・目標>がつきまとって存在する。
- (3) <判断基準> : 行動主体が、<留意事項>とこれにつきまとう<価値・目標>に関して配慮する上では、言語社会や言語場面に応じた判断・評価・選択などの<判断基準>が働く。

このように何を気にして、どのような言語行動に仕上げ、何をよりどころにして配慮するかという観点から検討することも、日本人と韓国人の言語行動の特徴を解明していくための手がかりとなると言える。本稿でも、このような留意事項の一つとして行動主体である伝え手が誰の立場を最も気遣うかという問題に注目し、伝聞行動における配慮の判断基準の解明を試みたい。そして、伝聞情報の内容や伝え手と聞き手との関係などの要素によって伝聞行動における伝え手の意識にどのような違いがあるかなどを多角的に探るとともに、日本人と韓国人の特徴を比較検討していくことにする。

5) 国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版 p.3

### 3. 調査概要

調査は日韓の大学生(一部大学院生を含む)を対象に2006年10月～2007年1月にかけて実施した<sup>6)</sup>。日本での調査は、関東地区(東京近郊)、中部地区(名古屋近郊)、関西地区(大阪近郊)の3都市で行い、韓国での調査は、首都圏地区(ソウル近郊)、忠清道地区(大田近郊)、慶尚道地区(釜山近郊)で行った。また、回答者の負担を軽減するため、調査は「調査1」

「調査2」の2種類に分け、実施した。回答者の人数は、韓国語母語話者(以下、KS)が764名、日本語母語話者(以下、JS)が757名の計1521名で、実施地域別の内訳は表1の通りである。

分析対象とした伝聞場面<sup>7)</sup>は、『急用ができたので、今日は行けない』という元話し手のメッセージを伝え手が聞き手に伝える場面(以下、【キャンセル】場面)と、『今日は行けないので、参加費を返してほしい』という元話し手のメッセージを伝え手が聞き手に伝える場面(以下、【返金要求】場面)の2つである。以下に「調査1」の具体的な状況説明の例を示す。

#### 【キャンセル】の伝聞場面

あなたは大学で開催されるシンポジウムで、友達と一緒に受付係のアルバイトをすることにしました。シンポジウムの当日、参加予定の人からあなたに連絡がありました。それは急用ができたので、今日は行けないという内容でした。あなたは、すぐに近くにいる責任者の先生(同じ学科の親しい先生)のところへ行き、このことを伝えようと思っています。

表1 調査地域および人数 単位：人

	地域	調査1	調査2	計
韓国	ソウル	175	163	338
	釜山	125	117	242
	大田	93	91	184
	小計	393	371	764
日本	東京	111	111	222
	大阪	123	118	241
	名古屋	147	147	294
	小計	381	376	757

6) 調査は、アンケート形式で行い、学部の授業内で教員が調査票を配布し、その場で回収するという形で実施した。そのため、回答者のほとんどは学部生であるが、僅かに大学院生も含まれている。また、授業内での一斉実施が難しい場合には、個別に依頼するという方法をとった。

7) 場面は、どちらも一般市民が参加するようなシンポジウムを想定し、【キャンセル】場面よりも【返金要求】場面のほうが、伝え手にとって予想外かつ想定外の事態で、伝え手が元話し手の考えに対し驚きと戸惑いを感じそうな内容になるように設定した。

【返金要求】の伝聞場面

あなたは大学で開催されるシンポジウムで、友達と一緒に受付係のアルバイトをすることになりました。シンポジウムの当日、参加予定の人からあなたに連絡がありました。それは今日は行けないので、参加費を返してほしいという内容でした。あなたは、すぐに近くにいる責任者の先生（同じ学科の親しい先生）のところへ行き、このことを伝えようと思っています。

また、この調査では元話し手5名と聞き手2名を置き、表2のとおり10通りの伝達パターンを設定した。「調査1」「調査2」とともにシンポジウムに参加予定の「元話し手」は、「よく知っている同じ学科の親しい先生（以下、親・先生）」「同じ学科の親しい友人（以下、親・友人）」「自分の親：父親または母親（以下、父母）」「よく知らない他大学の先生（以下、疎・先生）」「よく知らない他大学の学生（以下、疎・学生）」である。また、「調査1」の聞き手はシンポジウムの責任者である親しい先生（以下、責・先生）、「調査2」の聞き手はシンポジウムと一緒に受付のアルバイトをしている同じ学科の親しい友人（以下、受・友人）である<sup>8)</sup>。

表2 伝達パターン

	元話し手	聞き手
調査1	親・先生	責・先生
	親・友人	
	父母	
	疎・先生	
	疎・学生	
調査2	親・先生	受・友人
	親・友人	
	父母	
	疎・先生	
	疎・学生	

回答者には、【キャンセル】および【返金要求】の2つの場面における「伝え手」となってもらい、伝え手が元話し手から直接聞いた情報を聞き手に伝える際、元話し手と聞き手のどちらを気遣うかについて選択式の質問をし、「元話し手」「聞き手」「どちらも同じ」「特に考えない」の中から回答を一つ選んでもらった<sup>9)</sup>。

分析は、エクセルとSPSSによって単純集計・クロス集計を行った。なお、無回答については、欠損値として分析対象から除外した。

## 4. 分析と考察

ここでは、日本人と韓国人の伝聞行動における配慮意識が、伝聞内容の違いや伝え

8) 聞き手の「責・先生」と「受・友人」はどちらも伝え手と同じシンポジウムの関係者であり、ともに同じ学部の子供という設定である。一方、「元話し手」は単なる参加者であり、シンポジウムの仕事に携わっていない。

9) 調査では配慮意識以外にも、心的負担度や言語表現等に関する質問も行ったが、ここではその一部である配慮意識のデータだけを用いることにする。

手と聞き手との関係、伝え手と元話し手との関係によってどのように異なるかについて分析していく。なお、伝え手の配慮意識について分析をするにあたって、それぞれの伝聞場面において伝え手が伝聞情報を聞き手に伝える際に、実際にどのくらい伝えにくさを感じているのかという心的負担度が、伝え手の配慮意識と深くかかわりがあると考えられるため、石塚(2007)の結果の一部を参考にして、分析を進めていくことにする。石塚は日韓ともに【キャンセル】場面よりも【返金要求】場面のほうが伝え手が心的負担度を感じる傾向が高いとし、心的負担度が高い順序に元話し手を並べている。表3にこの結果を示す<sup>10)</sup>。

表3 伝聞場面における心的負担度の高さ

場面	聞き手	国	心的負担度が高い元話し手の順序
キャンセル	責・先生	KS	父母 > 親・友人 > 親・先生 ≧ 疎・先生 > 疎・学生
		JS	父母 ≧ 親・先生 ≧ 親・友人 > 疎・先生 > 疎・学生
	受・友人	KS	父母 ≧ 親・先生 > 親・友人 > 疎・先生 > 疎・学生
		JS	父母 ≧ 疎・先生 > 親・友人 = 疎・学生 > 親・先生
返金要求	責・先生	KS	父母 > 親・友人 > 親・先生 ≧ 疎・先生 > 疎・学生
		JS	父母 > 親・先生 > 親・友人 > 疎・先生 > 疎・学生
	受・友人	KS	父母 > 親・先生 > 親・友人 > 疎・先生 > 疎・学生
		JS	父母 ≧ 親・先生 > 親・友人 > 疎・先生 > 疎・学生

この結果から、日韓ともに伝聞内容や聞き手にかかわらず、元話し手が「父母」である場合に最も伝えにくいと感じ、聞き手が「受・友人」の【キャンセル】場面を除いては、「父母」に次いで、親しい間柄の人物、親しくない間柄の人物の順で伝えにくさを感じている。また、聞き手が「責・先生」の場合は、伝え手と元話し手が親しい間柄かどうかによって日韓の心的負担度の差が顕著であったと報告している。

以上の伝え手の心的負担度を参考にしながら、本稿では人間関係の違いや場面の違いに注目し、日韓の伝聞場面における配慮意識について考察していく。人間関係といっても、伝聞行動は元話し手、伝え手、聞き手によって構成されているため、これらの3者の相互関係を見ていく必要がある。そこで、このような複雑に構成された人間関係を整理するため、本稿では「伝え手と聞き手との関係」および「伝え手と元話し手との関係」に焦点を当てる<sup>11)</sup>。これらの関係がそれぞれ伝え手の配慮意識にどのような影響を与えるのかを探るため、先に「伝え手と聞き手との関係」を見て、全体的な傾向を観察してから、次に「伝

10) 記号は「A>B(AはBより大きい)」「A≧B(AはBより非常に大きい)」「A≦B(AはBより大きいまたは等しい:数値差0.5%以下の場合)」「A=B(AとBは等しい)」という意味で使用する。詳しい数値差については石塚(2007)を参照。

11) ここでは、人間関係の細分化による複雑化を避けるため、今回は「元話し手と聞き手との関係」については、特に取り上げないこととする。

「伝え手と元話し手の関係」による違いについて場面および聞き手ごとに詳しく見ていくことにする。また、場面については、伝聞情報が比較的軽い内容と考えられる【キャンセル】場面を先に見てから、伝聞情報が【キャンセル】場面に比べて重いと考えられる【返金要求】場面を検討することにする。

#### 4. 1 聞き手との関係から見た伝え手の配慮意識

まず「伝え手と聞き手との関係」を軸にして、伝え手の配慮意識の違いを場面ごとに見ていく。そして、実際の伝聞場面において伝え手が直接接することになる聞き手が「責・先生」であるか「受・友人」であるかによって、日本人と韓国人の伝え手の配慮意識にどれくらいの違いがあるのかについて観察し、全体的傾向を分析していく。

##### 4. 1. 1 【キャンセル】の場面

では【キャンセル】場面での伝え手の配慮意識に日韓で違いがあるかどうかを見てみる。表4は【キャンセル】場面において『急用ができたので、今日は行けない』という内容の伝聞情報を聞き手に伝える際の伝え手の気遣いを示したものである。

表4 キャンセル場面における伝え手気遣い

単位：人(%)

聞き手 \ 気遣い		元話し手	聞き手	どちらも同じ	特に考えない	計
責・先生	K S	280(14.4)	845(43.4)	488(25.0)	336(17.2)	1949(100)
	J S	273(14.4)	792(41.8)	430(22.7)	398(21.0)	1893(100)
受・友人	K S	239(13.0)	437(23.7)	486(26.4)	680(36.9)	1842(100)
	J S	322(17.3)	279(15.0)	250(13.4)	1012(54.3)	1863(100)

表4を見ると、聞き手が「責・先生」の場合、日韓ともに「聞き手」を気遣うと回答した割合が最も多く、40%を超えている。また、「聞き手」に次いで「どちらも同じ」くらい気遣うと回答した人の割合が高く、日韓ともに20%を超えている。この「聞き手」を気遣うという回答と「どちらも同じ」くらい気遣うという回答は、どちらも聞き手に対する気遣いが存在するため、これらの割合を合わせて考えると、聞き手側を気遣う割合は日韓ともに60%を越えることになる<sup>12)</sup>。その一方で「元話し手」と「特に考えない」と答えた人の割合は、日韓ともにかなり低くなっている。

一方、聞き手が「受・友人」の場合を見てみると、日韓ともに「特に考えない」と回答

<sup>12)</sup>本稿における「どちらも同じ」くらい気遣うという回答は、「聞き手」と「元話し手」の両方を気遣うという意味を持つと解釈できる。そのため、場合によっては「聞き手」のほうを気遣うという回答や「元話し手」のほうを気遣うという回答を併せて、幅広く検討していくこととする。

した人の割合が最も高く、特にJSは54.3%と半数を超え、KSよりもかなり数値が高い。また、KSは「特に考えない」36.9%に次いで、「どちらも同じ」が26.4%、「聞き手」が23.7%の順で多く、どちらも20%を越えている。「聞き手」および「どちらも同じ」と回答した割合を合わせて考えると、KSは聞き手を気遣う割合が半数を超えることになり、「特に考えない」以外のすべてで20%を下回っているJSの結果とは、大きな差が見られる。また、JSは「聞き手」を気遣う割合よりも、わずかに「元話し手」を気遣う割合の方が高いことも興味深い。

以上のように、【キャンセル】場面では、聞き手が「責・先生」か「受・友人」かによって、伝え手の配慮意識がかなり異なることが分かった。聞き手が「責・先生」である場合は「聞き手」のほうに気を配ることが多く、両国で似たような傾向が見られた。これは、日本も韓国も、目上を敬う文化であり、たとえ親しい間柄でも先生に対して話をする場合はかなり気を配るためであろうと推測できる。また、聞き手が「受・友人」の場合は、「責・先生」の場合よりも全体的に配慮意識は低く、日韓ともに「特に考えない」という人がかなり多かった。しかし、韓国人のほうが日本人より聞き手である「受・友人」に対しての配慮意識が高く、韓国人は聞き手である親しい友人に気を配る傾向があるが、日本人は聞き手である親しい友人に気遣いをする必要をあまり感じないようである。

#### 4. 1. 2 【返金要求】の場面

では、次に【キャンセル】場面よりも伝聞内容が重い【返金要求】場面では、聞き手が誰かということによって伝え手の気遣いはどのように変化するかをしてみることにする。表5は【返金要求】の場面において『今日は行けないので、参加費を返してほしい』という内容の伝聞情報を伝える際の伝え手の気遣いを示したものである。

表5を見ると、聞き手が「責・先生」の場合、日韓ともに「聞き手」を気遣う割合が最も高く、50%程度を占めている。これは、【キャンセル】場面よりも割合が少し高くなっていると言える。また、「聞き手」に次いで「どちらも同じ」と回答した人の割合が高く、日韓ともに20%以上を占めている。この割合は【キャンセル】場面とほぼ同じである。さらに、【返金要求】場面でも「元話し手」と「特に考えない」と回答した人は少なく、その割合は両国とも【キャンセル】場面よりも僅かに低くなっている。全体的にKSとJSは非常に似た傾向があることが分かる。

表5 返金要求場面における伝え手の気遣い

単位：人(%)

聞き手 \ 気遣い		元話し手	聞き手	どちらも同じ	特に考えない	計
責・先生	K S	211(10.8)	963(49.4)	501(25.7)	275(14.1)	1950(100)
	J S	200(10.8)	934(50.6)	428(23.2)	283(15.3)	1845(100)
受・友人	K S	233(12.8)	587(32.1)	544(29.8)	463(25.3)	1827(100)
	J S	249(13.5)	470(25.5)	306(16.6)	820(44.4)	1845(100)

一方、聞き手が「受・友人」の場合を見てみると、KSは「聞き手」を気遣う割合が最も高く、これに次いで「どちらも同じ」と回答した人の割合が高い。「聞き手」および「どちらも同じ」と回答した割合を合わせて考えると、KSは聞き手側を気遣う割合が60%を超えることになる。「特に考えない」と回答した人が最も多い【キャンセル】場面よりも、KSは聞き手である「受・友人」に対する配慮意識が高くなっている。また、JSは「特に考えない」が44.4%で最も多く、次いで「聞き手」を気遣うという回答が多くなっている。【キャンセル】場面に比べると、割合の高い順序は変わらないものの、「特に考えない」の割合が10%ほど低くなり、「聞き手」を気遣う割合が10%ほど高くなっている。さらに、KSと比べるとJSは「どちらも同じ」くらい気遣うと答えた割合がかなり低いことが分かる。

このことから、【返金要求】場面では、【キャンセル】場面と同様に、聞き手が「責・先生」の場合、日本と韓国で非常に似た傾向が見られ、伝聞内容の負担度が増すと、聞き手である「責・先生」を気遣う割合が高くなることが分かった。これは、伝聞内容が伝えにくくなると、目上である聞き手に失礼になったり、元話し手や伝え手自身の立場も悪くなったりする危険性もあるため、やはり聞き手の反応が気になってしまうのではないかと考えられる。また、聞き手が「受・友人」の場合も、聞き手が「責・先生」の場合と同様に、伝聞内容の負担度が高くなると、両国で「聞き手」と「どちらも同じ」と回答する割合が少し高くなっていた。特に、KSは聞き手である友人のほうを気遣ったり、元話し手と聞き手の両方に気遣ったりすることが多く、場面による変化も大きかったが、JSは場面にかかわらず、聞き手である友人にはあまり気を配らないようである。これは、非常に興味深い結果であり、日韓の親しい友人に対する認識の違いが現われたのではないかと推測される。

#### 4. 2 元話し手との関係から見た伝え手の配慮意識

では、次に「伝え手と元話し手の関係」を軸にして、日韓の伝え手の配慮意識について見ていく。実際の伝聞場面には登場せず、話題の人物となる元話し手が「親・先生」「親・友人」「父母」「疎・先生」「疎・学生」の5名のうちの誰であるかによって

伝え手の配慮意識がどのように異なるかについて、場面および聞き手ごとに詳しく見ていくことにする。

図1 キャンセル場面／聞き手「責・先生」の場合(KS)

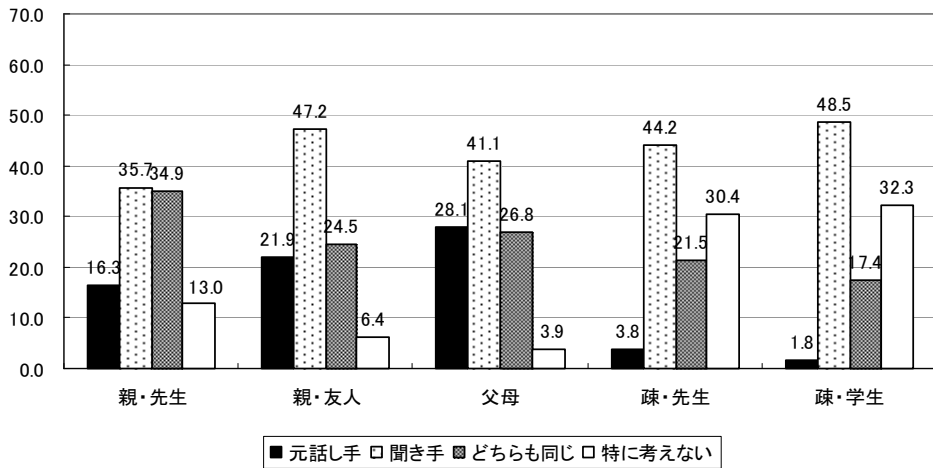
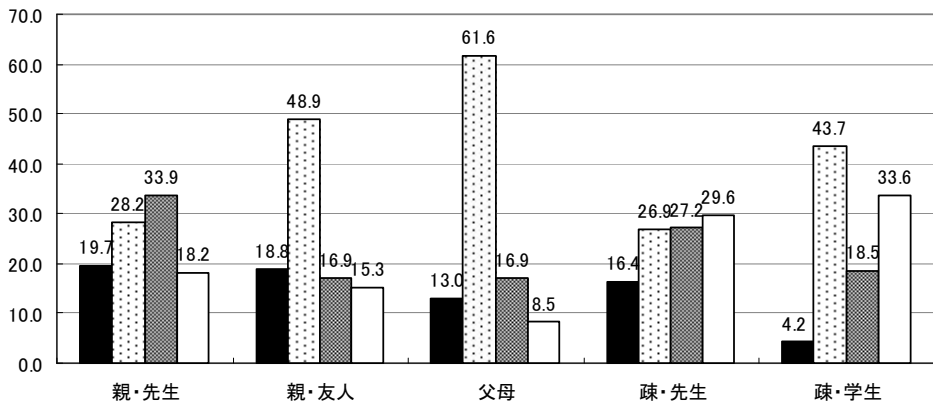


図2 キャンセル場面／聞き手「責・先生」の場合(JS)



#### 4. 2. 1 【キャンセル】の場面

まず、【キャンセル】場面で聞き手が「責・先生」および「受・友人」の場合、元話し手によって伝え手の配慮意識にどのような違いがあるか見てみる。図1と図2は聞き手が「責・先生」の場合の日韓の気遣いを示したものである。

図1を見ると、KSは元話し手が誰であっても、聞き手である「責・先生」を気遣う割合が最も高く、「親・先生」が元話し手である場合を除いて「聞き手」を気遣う割合が40%を超えている。「親・先生」が元話し手である場合は、「聞き手」を気遣う割合は35.7%で他の元話し手より低いが、「どちらも同じ」くらいと回答した人の割合は34.9%で最も高くなっている。また、「元話し手」を気遣う割合を見ると、「父母」が元話し手の場合28.1%で最も高く、次いで「親・友人」、「親・先生」の順になっている。また、「疎・先生」「疎・学生」が元話し手である場合は、「元話し手」と回答した人が極めて少ないが、その一方で「特に考えない」と回答した人の割合が30%を越え、親しい間柄の人物が元話し手である場合に比べ、かなり高くなっている。

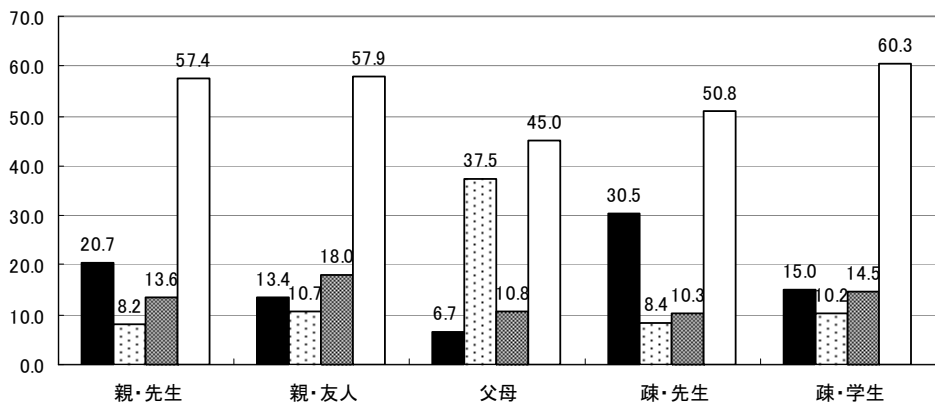
次に、図2のJSの結果を見ると、聞き手が「責・先生」の場合に「聞き手」を気遣う割合が「父母」、「親・友人」、「疎・学生」の順で高くなっている。特に「父母」の場合は、その割合が60%を越え、KSよりもかなり高い。また、目上である「親・先生」や「疎・先生」が元話し手の場合は、「聞き手」を気遣う割合が30%を下回り、「親・先生」の場合は「聞き手」と回答した人よりも「どちらも同じ」と回答した人が多く、「疎・先生」の場合は「特に考えない」と「どちらも同じ」と答えた人の割合が多くなっている。さらに、すべての元話し手において「元話し手」を気遣うと回答した人は、20%以下で全体的に少ないが、「親・先生」が元話し手の場合19.7%で最も高く、次いで「親・友人」、「疎・先生」の順になっている。元話し手が「父母」の場合、JSは「元話し手」を気遣うと答えた割合が13.0%とかなり少なく、KSの結果とはかなりの差があることが分かる。また、親しくない間柄である「疎・先生」や「疎・学生」が元話し手である場合は「特に考えない」と回答した人の割合が30%前後とKSとよく似た傾向が見られる。

以上のように、KSは「聞き手」が「責・先生」の場合、全体的に「聞き手」を気遣うことが多いことが分かったが、「疎・先生」や「疎・学生」のように親しくない間柄の人物が元話し手の場合は、それらの立場にほとんど気遣いをせずに伝える傾向があると言える。一方、JSは元話し手によって気遣う相手はかなり異なることが分かった。特に、元話し手が「父母」の場合に「聞き手」をかなり気遣う傾向があるが、これは日本人のウチとソトの捉え方が影響していると考えられる。「父母」のことを家族以外の人に話す場合、日本人は「父母」を自分と同等の立場として捉え、伝え手はまるで自分のことを話すように伝えるため、聞き手に対して気遣う割合が高くなると考えられる。また、「父母」とは逆に、「親・先生」と「疎・先生」が元話し手である場合、明らかに「聞き手」の立場を気遣う割合が低くなる。これは日本人が元話し手と親しいかどうかではなく、元話し手が先生という立場である場合に元話し手と聞き手の両方を気遣う傾向があると考えられる。

図3 キャンセル場面／聞き手「受・友人」の場合(KS)



図4 キャンセル1場面／聞き手「受・友人」の場合(JS)



では、次に聞き手が「受・友人」の場合は元話し手によって配慮意識にどのような違いがあるかを場面ごとに詳しく見ていく。図3と図4は聞き手が「受・友人」の場合の伝え手の気遣いを示したものである。

図3を見ると、KSでは「疎・先生」および「疎・学生」が元話し手の場合、半数近くの人が「特に考えない」と回答している一方、「元話し手」を気遣いと答えた人は極めて少ない。また、「親・先生」、「親・友人」、「父母」が元話し手の場合、「どち

らも同じ」と回答した割合が最も高く、KSの聞き手と元話し手の両者に対する気遣いの高さが際立っている。特に、元話し手が「父母」の場合は、「元話し手」が26.9%、「聞き手」が26.1%と同じような割合であり、これらの結果を「どちらも同じ」くらい気遣う割合と合わせて考えると、気を配る割合がどちらも50%を超えることになる。

図4を見ると、全体的に「特に考えない」と回答した人の割合が高く、元話し手が「父母」の場合を除いてすべて半数を超えている。元話し手が「父母」の場合は、他の元話し手に比べ「聞き手」を気遣う割合が高く、JSは「元話し手」の父母の立場を気遣う割合が最も低くなっている。これはKSとは異なった結果であると言える。また、JSは元話し手が「疎・先生」の場合、「元話し手」を気遣う割合が30%を超えて、聞き手が「責・先生」の場合よりも高い割合を示していることは、非常に興味深い結果であると言える。

このように、KSは聞き手が「受・友人」の場合、「元話し手」との親しい間柄かどうかによって配慮意識が異なることが明らかである。また、KSはたとえ聞き手が親しい友人であっても元話し手が自分の両親であると、聞き手や元話し手に対しかなり気を配る傾向があることが分かる。一方、JSは聞き手にかかわらず、元話し手が先生である場合には、元話し手に対して気を使うことが多くなる。特に、聞き手が「受・友人」の場合、JSは伝え手および聞き手がともに知っている「親・先生」のことよりも、お互いによく知らない「疎・先生」を気遣う傾向があると言える。

以上、【キャンセル】場面では、聞き手が「責・先生」でも「受・友人」でも、元話し手による日韓の違いが見られた。特に、聞き手が「受・友人」の場合は、その違いがはっきりしていた。また、聞き手が「責・先生」の場合は、元話し手が伝え手の身内である「父母」の場合と目上の存在である「親・先生」と「疎・先生」の場合にかなりの差が現れていた。石塚(2007)の結果では、聞き手が「責・先生」でも「受・友人」でも元話し手が「父母」である場合、日韓ともに心的負担度が最も高いことが明らかになっているが、日本人も韓国人も同じように伝えるにいと感じていても、配慮意識は異なるようである。KSは元話し手の父母を気遣う割合が高くなる傾向があるが、JSの場合は元話し手の父母を気遣う割合は少なくなり、聞き手を気遣う割合が高まるというように日韓で対照的な結果となった。これは、日韓で家族以外の人物に自分の両親について話をするときの意識が異なることが原因であると考えられる。さらに、【キャンセル】場面では聞き手がどちらであっても、元話し手が目上である先生の場合に日韓の違いが大きく現れた。これは、KSは親しいか親しくないかによって配慮意識が変わるのに対し、JSは伝え手が元話し手と親しいかどうかという問題よりも、元話し手が先生かどうかによって配慮意識の違いが現われると考えられる。

図5 返金要求場面／聞き手「責・先生」の場合(KS)

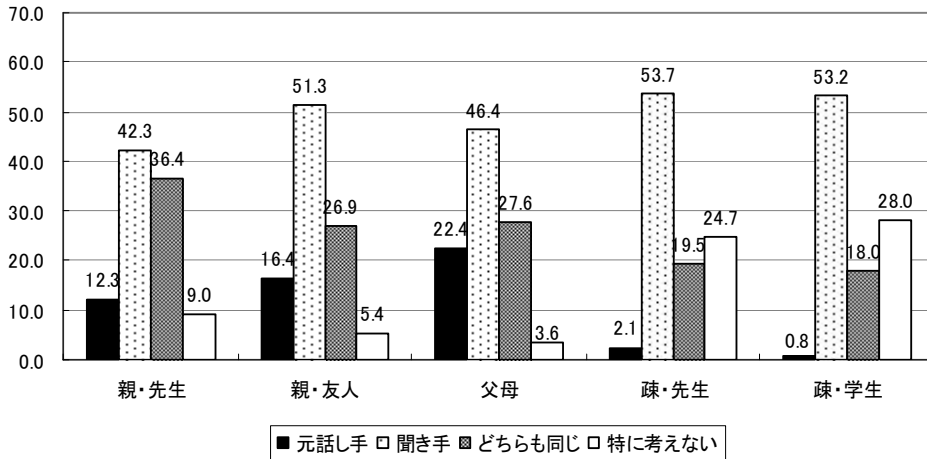
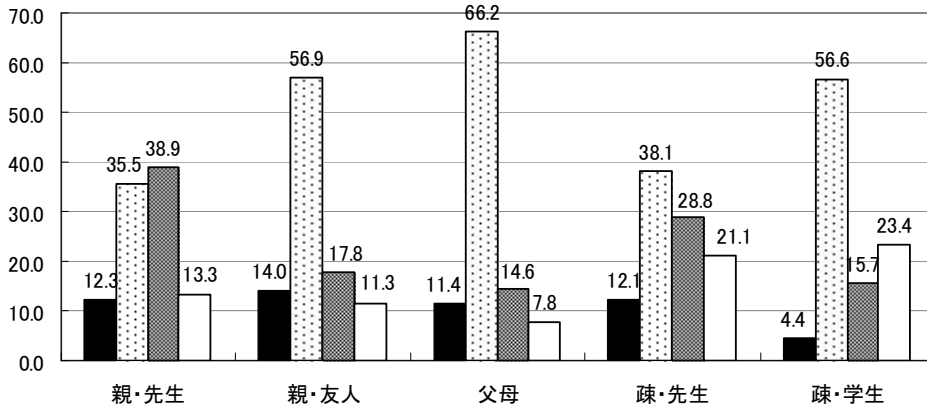


図6 返金要求場面／聞き手「責・先生」の場合(JS)



#### 4. 2. 2 【返金要求】の場面

では、【返金要求】場面ではどうかであろうか。【返金要求】場面で聞き手が「責・先生」および「受・友人」の場合、元話し手によって伝え手の配慮意識にどのような違いがあるか見てみる。図5と図6は【返金要求】場面で聞き手が「責・先生」の場合の気遣いを元話し手ごとに示したものである。

図5を見ると、KSは全体的に聞き手である「責・先生」を気遣う割合が高く、50%近くを占めている。「親・先生」が元話し手である場合は、他の元話し手に比べ「聞き

手」を気遣う割合が42.3%で最も低い、「どちらも同じ」くらいと回答した人の割合は36.4%で最も高くなっている。元話し手があまり親しくない間柄の「疎・先生」「疎・学生」である場合に比べ、「父母」や親しい間柄である「親・先生」「親・友人」の場合には、元話し手のほうを気遣う割合が比較的高くなっている。また、元話し手が「疎・先生」と「疎・学生」である場合は、「特に考えない」と回答した割合が他の元話し手に比べ高い。

図6を見てみると、JSは「親・先生」が元話し手である場合を除いて、「聞き手」を気遣う割合が最も高い。特に、元話し手が「父母」の場合は66.2%と最も高く、「疎・先生」や「疎・学生」も半数を超えている。また、「親・先生」と「疎・先生」が元話し手である場合は、「聞き手」を気遣う割合が40%を下回り、特に「親・先生」の場合は「聞き手」よりも「どちらも同じ」と回答した人の割合が38.9%で最も高くなっている。

以上のように、聞き手が「責・先生」の【返金要求】場面では、元話し手が「親・友人」および「疎・学生」である場合を除き、日韓で伝え手の気遣いにかんがりの違いが見られる。特に、「親・先生」と「疎・先生」が元話し手である場合の気遣いの違いが顕著であった。この結果を聞き手が「責・先生」の【キャンセル】場面の結果と比べると、【返金要求】場面は【キャンセル】場面より「聞き手」を気遣う割合が高くなり、「元話し手」および「特に考えない」と答える割合が少し低くなるといった多少の数値の違いは見られるが、全体的に【返金要求】と【キャンセル】場面の結果が非常に似た傾向があることが分かる。特に、どちらの場面でも、KSは元話し手が誰であっても「聞き手」と答えた割合が最も高く、親しくない間柄の人物が元話し手の場合は、親しい間柄の人物に比べ、「元話し手」だけを気遣う割合はかなり低くなるが、「特に考えない」と回答した割合は高くなる。また、JSは目上である「親・先生」や「疎・先生」が元話し手である場合、聞き手を気遣う割合がかなり低くなるという傾向が見られる。その一方で、興味深い差も少し見られる。元話し手が「疎・先生」の場合に注目すると、JSでは【返金要求】場面において「どちらも同じ」よりも「聞き手」と回答する人が多くなっていて、【キャンセル】場面の「疎・先生」が元話し手の場合とは違いが見られる。また、【返金要求】では「親・先生」と「疎・先生」が元話し手の場合の違いも、【キャンセル】場面よりはっきりしていると言える。

では、次に聞き手が「受・友人」の場合を見てみる。図7と図8は【返金要求】場面の聞き手が「受・友人」の場合の伝え手の気遣いを元話し手ごとに示したものである。

図7 返金要求場面／聞き手「受・友人」の場合(KS)

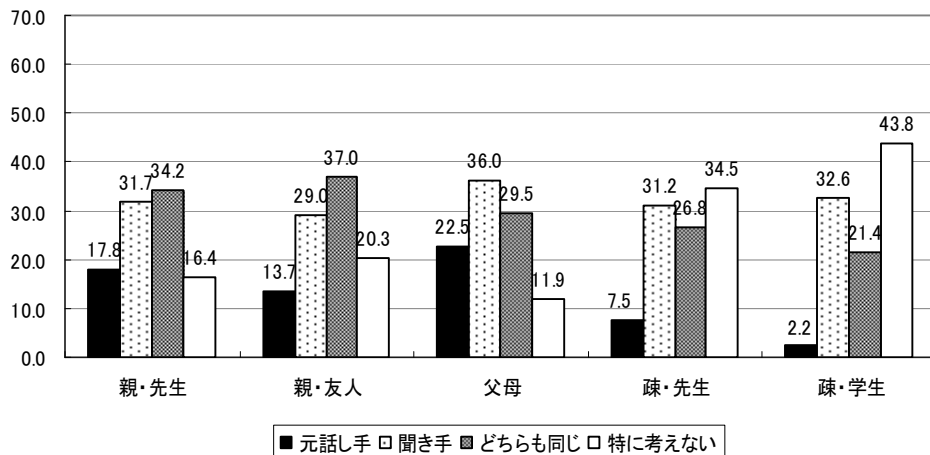


図8 返金要求場面／聞き手「受・友人」の場合(JS)

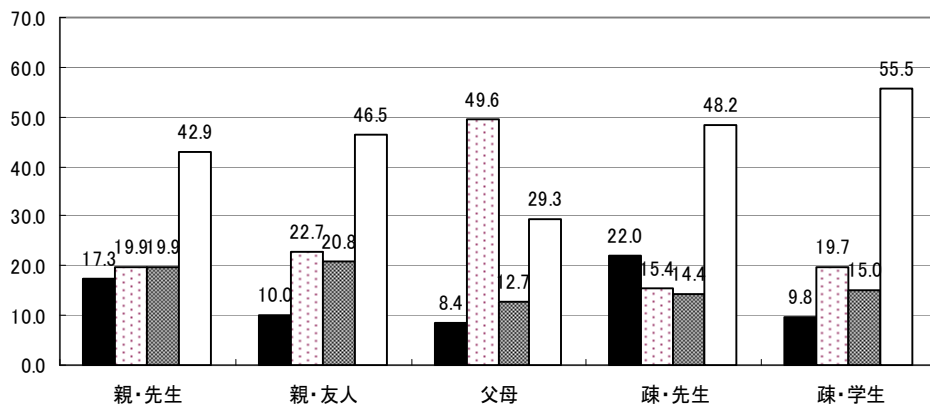


図7を見ると、KSは元話し手が「親・先生」と「親・友人」の場合、「どちらも同じ」と答えた割合が最も多い。元話し手が「疎・先生」と「疎・学生」の場合は「特に考えない」と回答した人の割合が最も高い。また、元話し手が「父母」の場合は、「聞き手」を気遣う割合が最も多く、他の元話し手に比べると、「元話し手」のほうを気遣う割合も高くなっている。

図8を見てみると、KSの結果とは大きく異なり、元話し手が「父母」以外は、「特に考えない」と回答した人の割合が最も高く、40%を超えている。元話し手が「父母」の場

合は、「特に考えない」と回答した割合が30%を下回り、「聞き手」を気遣う割合が半数近くに達している。また、「元話し手」を気遣う割合は、元話し手が「父母」の場合に最も低く、「疎・先生」の場合に最も高くなっている。

このように聞き手が「受・友人」の【返金要求】場面では、元話し手が誰であってもKSはJSよりもかなりの気遣いをする事が分かった。特に、「父母」が元話し手である場合の配慮意識が日韓でかなり違っていた。この結果を【キャンセル】場面の結果と比べると、日韓ともに【返金要求】場面のほうが「聞き手」を気遣う割合がかなり高くなり、また「どちらも同じ」くらいと回答した割合も少し高くなっていることが分かる。その一方で「特に考えない」と答えた割合が全体的に低くなっていることが分かった。

以上のように、【返金要求】場面においても、【キャンセル】場面と同様に、聞き手が「責・先生」と「受・友人」の場合の両方で日韓の差がかなりあることが分かった。石塚(2007)の【返金要求】場面の結果でも、聞き手にかかわらず、日韓ともに「父母」が元話し手である場合に心的負担度が最も高く、その割合は【キャンセル】場面よりも高いことが明らかになっているが、このような伝聞内容の違いによって心的負担度が高くなると、「聞き手」への気遣いが高まる傾向があると考えられる。さらに、聞き手が「受・友人」の場合は全体的に差が大きく、聞き手が「責・先生」の場合も元話し手が「父母」や「親・先生」「疎・先生」の場合に日韓で明らかな違いが見られることが分かった。これは【キャンセル】場面でも見られたように、日本人と韓国人の親に対する意識やウチ・ソトの捉え方の違いが反映された結果であろう。伝聞行動において常に親の立場を直接的に気遣おうとする韓国人とは対照的に、日本人は親を自分と同じ立場に置くことで、聞き手との関係を保っているのではないかと推測できる。また、【返金要求】場面においても、やはり場面や聞き手にかかわらず、韓国人は元話し手との親疎関係によって配慮意識が変わるのに対し、日本人は元話し手が目上の先生である場合、親疎にかかわらず、元話し手を気遣う傾向があると言える。このような日韓の伝聞行動における配慮意識の違いは、言語表現だけでなく、伝聞場面での敬語運用<sup>13)</sup>やストラテジーなどにも深くかかわる問題であり、さまざまな角度からの検討が今後期待される。

13) 日本語および韓国語の敬語運用（第三者待遇を含む）の特徴や両国の敬語運用の基準になる要素としての上下、親疎、ウチ・ソトなどの人間関係などについては、姜(1996、2005)で詳しく述べられている。

## 5. まとめ

以上、本稿では、【キャンセル】【返金要求】の2つの伝聞場面における日韓の配慮意識の違いについて述べてきた。今回は言語表現の違いについては触れないが、言語の奥に潜んだこのような配慮意識の違いを明らかにすることは、目に見えないところで起こりかねないトラブルを回避し、日韓のコミュニケーションを円滑に進めるために非常に重要であると言える。以下に本稿で確認できた伝聞行動における日韓の特徴をまとめておく。

まず、聞き手が「責・先生」である場合の特徴について見ると、【返金要求】場面でも【キャンセル】場面でも、日韓ともに「聞き手」のほうに気を配ることが多いことが分かった。特に、日本ではその割合がかなり高く、元話し手が「父母」の場合には聞き手を気遣う割合が韓国よりもかなり高かった。一方、韓国人は元話し手が「父母」の場合、「聞き手」に次いで「元話し手」を気遣う傾向があることが分かった。さらに、聞き手と元話し手がどちらも先生である場合は、日韓の違いが明確であった。

次に、聞き手が「受・友人」である場合の特徴を見ると、【返金要求】場面でも【キャンセル】場面でも、全体的に韓国人のほうが日本人より配慮意識が高いことが分かった。特に、韓国人は「元話し手」との親疎関係によって配慮意識が異なり、元話し手が自分の親であると、聞き手や元話し手に対しかなり気を配る傾向があるが、日本人は全体的に特に気遣いをしない傾向があり、元話し手が「疎・先生」の場合は元話し手を気遣う傾向が見られた。

最後に、場面による違いについて述べると、【返金要求】場面では、【キャンセル】よりも「聞き手」を気遣う割合が高く、「どちらも同じ」くらい気遣いと回答した割合も少し高くなっていることが分かった。その一方で「特に考えない」と答えた割合が低くなっていた。

以上のように、本稿では【キャンセル】と【返金要求】の2つの伝聞場面における日本人と韓国人の配慮意識の違いが明らかになったが、このような違いを踏まえ、今後は男女差や地域差についても検討するとともに、伝聞場面では実際にどのような言語表現が使用されるか、また聞き手に対してどのように働きかけるかなどについても詳しく観察していきたい。また、実際のコミュニケーション場面を適切に反映した伝聞場面を設定するなど、調査内容や方法についても工夫改善していくことが今後の課題である。

## 【参考文献】

- ・ 石塚ゆかり(2007) 「日本人と韓国人の伝聞行動に関する一考察－伝え手の心的負担度を中心に－」 『日語日文学研究』 62 韓国日語日文学会 pp.115-134
- ・ 井上和子(1983) 「日本語の伝聞表現とその談話機能」 『月刊言語』 12巻11号 大修館書店 pp.113-121
- ・ 任栄哲・井出里咲子(2004) 『箸とチョッカラク－ことばと文化の日韓比較』 大修館書店
- ・ 任栄哲(2006) 「韓国人とのコミュニケーション」 『韓国人による日本社会言語学研究』 真田信治監修 おうふう pp.7-19
- ・ 鎌田修(2000) 『日本語の引用』 ひつじ書房
- ・ 神尾昭雄(1990) 『情報のなわばり理論』 大修館書店
- ・ 姜錫祐(1996) 「韓国の企業敬語における日本語の影響をめぐって」 『世界の日本語教育』 第6号 国際交流基金 pp.219-235
- ・ \_\_\_\_\_(2005) 「話題にのぼる上位人物に対する敬語運用－市役所職員を対象にした調査結果から－」 『日本語研究の前衛－真田信治教授還暦記念論集－』 時事日本語社 pp.27-43
- ・ 国立国語研究所(2006) 『言語行動における「配慮」の諸相』 くろしお出版
- ・ 高見健一(2003) 「伝聞が伝聞でなくなるとき」 『月刊言語』 32巻7号 大修館書店 pp.29-35
- ・ 仁田義雄(2000) 『日本語の文法 3 モダリティ』 岩波書店 pp.79-159
- ・ 藤田保幸(2003) 「伝聞研究のこれから」 『月刊言語』 32巻7号 大修館書店 pp.22-28
- ・ 益岡隆志(1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- ・ 森山卓郎(1995) 「『伝聞』考」 『京都教育大学国文学会誌』 26 pp.25-36

## 要 旨

本稿では、伝聞情報の内容や伝え手と聞き手との関係などの要素によって伝聞行動における伝え手の意識にどのような違いがあるかを探り、韓国人と日本人の特徴を比較検討した。日韓の伝聞行動における気遣いの特徴をまとめると、聞き手が「責・先生」である場合、【返金要求】場面でも【キャンセル】場面でも、日韓ともに「聞き手」のほうに気を配ることが多いことが分かった。特に、日本ではその割合がかなり高く、元話し手が「父母」の場合には聞き手を気遣う割合が韓国よりもかなり高かった。一方、韓国人は元話し手が「父母」の場合、「聞き手」に次いで「元話し手」を気遣う傾向があることが分かった。さらに、聞き手と元話し手がどちらも先生である場合は、日韓の違いが明確であった。聞き手が「受・友人」である場合、【返金要求】場面でも【キャンセル】場面でも、全体的に韓国人のほうが日本人より配慮意識が高いことが分かった。特に、韓国人は「元話し手」との親疎関係によって配慮意識が異なり、元話し手が自分の親であると、聞き手や元話し手に対しかなり気を配る傾向があるが、日本人は全体的に特に気遣いをしない傾向があり、元話し手が「疎・先生」の場合は元話し手を気遣う傾向が見られた。

以上、本研究では日韓の伝聞行動における配慮意識に違いがあることが明らかとなった。

キーワード：伝聞行動、言語行動、配慮意識、気遣い、伝え手、聞き手、元話し手

투 고 : 2007. 5. 31  
1차 심사 : 2007. 6. 9  
2차 심사 : 2007. 6. 30

住 所 : (420-743) 경기도 부천시 역곡2동 산 43-1 가톨릭대학교 일어일본문화학과  
電 話 : 02-2164-4458  
e-mail : ishiyuka@hotmail.com